

6 地域資源を生かした地域営農システムの構築

【成果の要約】

- 1 耕畜連携の改善（時期・土壌管理等）を支援し、新たに3戸（87a）のさとうきび農家が参加した。
- 2 さとうきび受託調整組織として「与論島さとうきび受託組合」が設立された。

1 対象

JA あまみ与論地区さとうきび部会 599 人，与論町和牛改良組合 315 人，与論島農作業受託班 7 人，与論島調苗班 7 人，地域計画作成対象地区（和泊町 21 地区，知名町 22 地区，与論町 3 地区）

2 課題を取り上げた理由

- (1) 与論島のさとうきび農家は、堆肥の未利用や労力不足による管理作業の遅れにより収量が低下している。また、生産牛農家では家畜糞尿の有効活用と自給粗飼料確保が進んでいない。そこで、堆肥利用並びにさとうきび後作を活用した自給粗飼料の確保を進めた耕畜連携システムを検討し、地域農業の生産性を高める必要がある。
- (2) 与論島のさとうきび生産は、高齢化や担い手不足により、植付けや管理作業の委託面積が増加してきているが、受託者不足や収穫作業との競合から、植付けが遅れることによる単収低下が問題となっており、受託調整組織設立が望まれている。
- (3) 農家の減少や耕作放棄地の拡大が進んでいるが、地域で守り続けた農地を次世代に引き継ぐために、目指すべき将来の農地利用の姿を明確化する「地域計画」の策定が必要である。

3 活動内容と成果

- (1) 耕畜連携活動の支援

耕畜連携実証グループで実証の経過・課題や耕畜連携の方法について検討を行い、耕畜連携の課題解決に取り組んだ。

ア 耕畜連携スケジュールの改善

さとうきび収穫後の牧草播種が遅れて収量が低下する事例やさとうきび農家へのほ場返還が遅れ、夏植え作業が遅れる事例が見られた。

そのため、耕畜連携のさとうきびほ場は1月までに収穫を終了し、2月には牧草をは種して、8月下旬にはさとうきび農家へほ場を返還することとした。

イ 土壌改良

耕畜連携ほ場で牧草の生育不良がみられた箇所はpHが低いことが判明した。そこで、研修会で土壌分析結果をもとにさとうきび植付け前や牧草は種前での石灰資材施用を指導した。また、耕畜連携ほ場はさとうきび収穫後に土壌分析し、pHが低いほ場に石灰資材を施用する場合は一部資材代を助成することとした。



<耕畜連携マッチング検討会>



< pHが低く生育不良の牧草ほ場 >



< 耕畜連携研修会 >

ウ ハカマの活用

新たな取組としてさとうきび収穫後のハカマをハカマロールにして飼料に活用できないか実証を行った。7 a のほ場で2個のハカマロールを作成して、2戸の生産牛農家で給餌した。



< さとうきび収穫 >



< ハカマロール作成 >



(2) さとうきび受託調整組織の設立支援

受託調整組織の設立に向けて受託作業内容・規約・収支計画・事務処理について検討を重ねた。

12月5日に9名の組合員で「与論島さとうきび受託組合」が設立された。組合は調苗班、植付班、管理班で組織され、調苗・植付・培土・除草・防除作業を受託することとした。



< 受託組合の設立総会 >

(3) 地域計画作成支援

各集落で地域計画策定に向けて協議を実施した。与論町では、集落の農業を維持拡大するためにはどうしたらよいかワークショップを行い、地域農業の将来像について考えた。



< 地域計画作成検討会：与論町 >

4 今後の課題

- (1) 耕畜連携の普及と連携体制の充実
- (2) 「与論島さとうきび受託組合」若手オペレーターの育成、組織活動充実
- (3) 地域計画見直し支援

5 担当した普及職員（○印はチーフ）

大久保剛，水迫陽子，○満吉俊也，松田慶五